

**■ PCN だより**

## PCN Volume62, Number 1 の紹介 (その 1)

2008年2月発行のPCN Vol.62, No.1にはEditorialが1本, Review Articleが1本, Regular Articleが14本, Short Communicationが3本, Letters to the Editorが2本, それに加えて, 第29回日本生物学的精神医学会の抄録集が掲載されている。

今月号の総説は, Assessment of risk of venous thromboembolism and its possible prevention in psychiatric patients (Radovan Malý, Jiří Masopust, Ladislav Hosák, and Kateřina Konupčíková) という題の静脈血栓症に関する論文である<sup>1)</sup>。最近, 精神科臨床において静脈血栓症が話題となり始めているが, 静脈血栓症の診断と治療についてのアルゴリズムを提案した論文である。著者らは, 精神科入院患者における静脈血栓症の臨床データをまとめるために, 2006年のMEDLINEから (schizophrenia OR depression OR bipolar) AND (antipsychotic OR anti-depressant) AND (venous thromboembolism OR pulmonary embolism) AND (prevention OR prophylaxis) で検索した。検索された論文に基づいて, 精神科入院患者に特徴的な項目を選択して静脈血栓症の予防のためのアルゴリズムを提唱した。静脈血栓症の既往, ガンの合併, 年齢, 感染症, 運動不能, ホルモン療法, 肥満, 静脈瘤, 血小板減少, 向精神薬などのチェックにより患者ごとのリスクの評価に従って得点化し, 0-3点については下肢の定期的な運動, 脱水の防止, 弾性包帯の使用を, 8点以上については運動, 補液, 弾性包帯, ヘパリン投与などの予防法を提案している。

Psychiatric symptoms in adolescents with Internet addiction: Comparison with substance use (Ju-Yu Yen, Chih-Hung Ko, Cheng-Fang

Yen, et al.) は, わが国でも問題となりつつある若者のインターネット中毒についての論文であり, 新しいトピックスである<sup>2)</sup>。インターネット中毒の若者の精神症状を物質乱用患者と比較するために, 若者3662名 (男性2328名, 女性1334名) について, 精神症状, インターネット中毒, 物質乱用についての自記式質問紙により調査した報告であるが, 結論をおおざっぱに言うと, インターネット中毒も物質依存もより重症の精神症状を呈していたという。そして, 精神症状の中では, 敵意と抑うつ症状が, インターネット中毒, 物質乱用の両方に関係していた。このような結果から, インターネット中毒は problem behavior theory の構造の中で理解できることを示唆し, ほかの問題行動と同様の治療法・予防法が考えられると結論している。インターネット中毒への対策には敵意, 抑うつ症状を呈する若者への特別な留意が重要であることを指摘した論文である。

Psychometric properties of the Korean version of the Short Post-Traumatic Stress Disorder Rating Interview (K-SPRINT) (Tae-Suk Kim, Moon Yong Chung, Won Kim, et al.) は, 8項目からなるPTSD評価尺度 (K-SPRINT) のバリデーション研究である<sup>3)</sup>。87名のPTSD, 47名の他の精神疾患, 63名の健常者について, K-SPRINT, Clinician-Administered PTSD Scale (CAPS), Beck Depression Inventory (BDI), State Anxiety Inventory (STAI) を評価した。K-SPRINTの, クロンバック係数は $\alpha=0.86$ , 再テスト係数は $r=0.82$ と高い値であった。CAPSとは $r=0.71$ の相関であり, 因子分析では1因子が抽出された。K-SPRINT得点15点をカットオフ値とすると, 91.9%の診断率であり, この場合の特異性と感度は90.8%と

92.7%であった。このような結果を踏まえて K-SPRINT は PTSD の診断に利用することができると報告している。

Dissociation and alexithymia among men with alcoholism (Cuneyt Evren, Vedat Sar, Bilge Evren, et al.) はトルコからの論文である<sup>4)</sup>。中毒センターの入院者 176 名についてアルコール症の男性におけるアレキシチミアと解離との関係を調査するために、Toronto Alexithymia Scale, Symptom Checklist Revised, Dissociative Experiences Scale, Beck Depression Inventory, Spielberger State-Trait Anxiety Inventory, Michigan Alcoholism Screening Test を調査した。53 名にアレキシチミアありとされ、このグループでは 62.3% に解離障害があり、不安素因、精神症状の重症度、病理的な解離はアレキシチミア群で高かった。これらの要因は感情認識と関係があり、不安素因は感情表出にも関連があった。このような結果から、男性アルコール症においてアレキシチミアは解離と慢性不安と関連しており、この三要因について検討することがアルコール症の治療と予防に役立つことを示している。

Nightmare disorder, dream anxiety, and subjective sleep quality in patients with borderline personality disorder (Umit B. Semiz, Cengiz Basoglu, Servet Ebrinc, et al.) もトルコからの報告であるが、ボーダーライン患者についての悪夢 (nightmare) の研究である<sup>5)</sup>。悪夢 (nightmare) の頻度、夢の不安度、主観的睡眠の質を調査し、さらに悪夢を呈するボーダーライン患者がより重症な臨床症状を呈するかどうかについて調査した。88 名のボーダーライン患者と年齢性別を一致させた 100 名の健常者について、structured Clinical Interview for DSM-3 Personality Disorder, Structured Clinical Interview for DSM-4 Axis I Disorder, Van Dream Anxiety Scale, Pittsburgh Sleep Quality Index, Dissociative Experiences Scale, Traumatic Experiences Checklist を調査した。ボーダーライン患者は、健常者と比較してより高い悪夢の頻度、よ

り高い夢の不安度、より低い睡眠の質を呈していた。ボーダーライン患者群において、高い夢不安は幼少期の外傷体験と解離性症状と相関していた。さらに悪夢を伴うボーダーライン患者群では悪夢のない群と比較してより重症度が高いという結果であった。これらの知見から、ボーダーライン患者においては悪夢と睡眠の質とが関係しており、このような患者では悪夢や睡眠の質を管理することにより症状を改善できる可能性を示唆している。

Effectiveness of mirtazapine for nausea and insomnia in cancer patients with depression (Sung-Wan Kim, Il-Seon Shin, Jae-Min Kim, et al.) は韓国からの報告であり、ミルタザピン (mirtazapine) 口腔内溶解錠が、がん患者によくみられる悪心、睡眠障害に有効かどうかを 4 週間投与で調べた前向きオープン試験である<sup>6)</sup>。評価は 0, 1, 3, 5, 7, 14, 28 日目に評価し、主要評価項目は悪心・嘔吐の全体臨床評価尺度、睡眠時間を含めた Chonnam National University Hospital-Leeds Sleep Evaluation Questionnaire (C-LSEQ) とし、副次評価項目は 36 項目 Short Form Health Survey の痛み関連項目、Montgomery-Asberg Depression Rating Scale (MADRS), EuroQol (EQ)-5 D とした。悪心を呈する患者 (n=28) は 1 日目から改善し、睡眠時間と C-LSEQ の各項目は 1-5 日から改善した。MADRS 得点と不安・抑うつと EQ-5 D は 1 週目から改善した。最初の数日間には約 1/3 の患者で日中の眠気が出現した。mirtazapine はがん患者の悪心、睡眠障害、痛み、QOL、抑うつを改善したことから、これらの症状を有するがん患者に有用であるとしている。

Six-month paroxetine treatment of premenstrual dysphoric disorder: Continuous versus intermittent treatment protocols (Kuan-Yi Wu, Chia-Yih Liu, and Mei-Chun Hsiao) は、台湾からの報告である<sup>7)</sup>。欧米諸国においては SSRI の月経前緊張症 (PMDD) に対する有効性が報告されているが、その投与方法には、持続投与と間歇投与とがある。この報告では東洋人

PMDD に対するパロキセチン持続投与と間歇投与の効果が6カ月間評価されている。36名の患者を2カ月間薬物無しにした後、パロキセチン(20 mg)を2カ月間投与した。そして、持続投与群(n=16)と間歇投与群(n=14)とに割り付けして4カ月間観察した。評価項目は Prospective Record of the Impact and Severity of Menstrual Symptomatology (PRISM), Hamilton Rating Scale for Depression/Anxiety (HAMD/HAMA), Clinical Global Impression (CGI) によった。すべての患者で、HAMA, HAMD, CGI, PRISM は改善したが、パロキセチンの有効性は持続投与群では50-78.6%, 間歇投与群では37.5-93.8%であり、パロキセチンは持続投与であっても間歇投与であっても有効でありその効果が6カ月間は持続していることが示唆されている。

2月発行のPCN volume 62, number 1にはこれらの外国からの投稿論文に加えて、日本からの投稿論文13本が掲載されています。日本からの投稿論文については、次号で紹介する予定です。

#### 文 献

- 1) Radovan Malý, Jiří Masopust, Ladislav Hosák, and Kateřina Konupčíková: Assessment of risk of venous thromboembolism and its possible prevention in psychiatric patients. *Psychiat Clin Neurosci* 62, 3-8, 2008
- 2) Ju-Yu Yen, Chih-Hung Ko, Cheng-Fang Yen, Sue-Huei Chen, Wei-Lun Chung, and Cheng-Chung Chen: Psychiatric symptoms in adolescents with Internet addiction: Comparison with substance use. *Psychiat Clin Neurosci* 62, 9-16, 2008
- 3) Tae-Suk Kim, Moon Yong Chung, Won Kim, Young Jin Koo, Seong Gon Ryu, Eui-Jung Kim, Jong-Min Woo, Tae-Hyung Kim, Jong-Chul Yang, Kyeong-Sook Choi, Chi-Un Pae, Ho-Joon Seo, Hyun-Kook Lim, Jeong-Ho Chae, and Disaster Psychiatry Committee in Korean Academy of Anxiety Disorders: Psychometric properties of the Korean version of the Short; Post-Traumatic Stress Disorder Rating Interview (K-SPRINT). *Psychiat Clin Neurosci* 62, 34-39, 2008
- 4) Cuneyt Evren, Vedat Sar, Bilge Evren, Umit Semiz, Ercan Dalbudak, and Duran Cakmak: Dissociation and alexithymia among men with alcoholism. *Psychiat Clin Neurosci* 62, 40-47, 2008
- 5) Umit B. Semiz, Cengiz Basoglu, Servet Ebrinc, and Mesut Cetin, MD: Nightmare disorder, dream anxiety, and subjective sleep quality in patients with borderline personality disorder. *Psychiat Clin Neurosci* 62, 48-55, 2008
- 6) Sung-Wan Kim, Il-Seon Shin, Jae-Min Kim, Young-Chul Kim Kyu-Sik Kim Ki-Min Kim, Su-Jin Yang and Jin-Sang Yoon; Effectiveness of mirtazapine for nausea and insomnia in cancer patients with depression. *Psychiat Clin Neurosci* 62, 75-83, 2008

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)